

評者: 外岡 秀俊 (朝日新聞本社 編集委員)

## 難民化食い止める個人たちの奮闘

九月十一日のテロは、私たちの繁栄が切り立つ断がいの上に築かれていたことを教えた。一步先の地面が消えたような恐怖が、まず社会をワシづかみにした。

次いで、奔騰したテロへの怒りと不安は武力の一点に凝結し、断がいの底に沈むアフガニスタンに急降下している。

だが、アフガンについて私たちは何を知っていたらう。地図上で攻防を伝える戦況報道は、爆撃下の人々の営みに、一片の想像力を働かせているだろうか。

この本は、事件直前までのアフガンの実態を伝える貴重な報告である。著者は十七年間、パキスタンとアフガンで診療を続けてきた。昨夏の大旱魃は、医療活動を直撃した。水が枯れて食器が汚染され、赤痢が流行した。人々が村を捨てようとした溶き、著者は無謀とも思える決断をする。「水源を確保して人々を引き留め、難民を出さない」活動に着手したのだ。表題にあるように本書は、医師がアフガン東部で井戸を掘り、住民の離散を食い止めた一年間の奮闘の記録である。

その成果は驚くべきものだ。今年八月末までに五百十二の水源を確保し、二十万人の難民化を防いだ。戦乱と渇水化で無人になった荒野に緑をよみがえらせ、一万人以上が帰村した例すらあったという。数トンもの巨石が埋まる地中では、高価な機械も歯が立たない。銃声が響く土地にあるのは地元の伝統工具だけだ。著者たちは必至の手掘り作業に挑む。古武士のように我が道を行く著者に、助



評者: 外岡 秀俊 (朝日新聞本社 編集委員)

っ人として登場する群像が鮮やかだ。著者の頼みで活動の元締になる蓮岡修青年。西アフリカから身一つで応援に駆けつけ、技を伝授して一陣の風のように立ち去る中尾伸一氏。地雷から火薬を取り出して巨石処理をする元ゲリラ兵、福岡を拠点に募金を集め、事業を支える「ペシャワール会」の人々。だれにも敵対せず、ただ住民の命を守ることだけを胸に丸腰の活動をする。戦闘的な平和主義が、著者たちの旗印だ。

著者は今月、参考人として国会に呼ばれ、「自衛隊派遣は有害無益」と述べた。色をなした与党議員は発言取り消しを求めたが、動じなかった。事件後に難民を「発見」した議員と、十七年間、はうようにその地に生きた著者たちと、どちらの言葉が現実を射抜いているのかあ。判断するのは、本書を読んでからでも遅くない。執筆後に起きた軍事行動について著者は、「私たちの文明は大地から足が浮いてしまった」と栞に書き添えている。難民になることすらできずに取り残された人々を、この冬の飢えからどう守るか。著者たちは基金を作り、新たな試練に立ち向かおうとしている。

